

「あ、おはようございます」

週明けの放課後、数日ぶりに足を運んだプロダクションビルのエントランスで、所属アイドルの一人である木場真奈美さんと来合わせた。私の挨拶に、真奈美さんは軽く手を上げて返答してくれた。

「おはよう。久しぶりだね加蓮。先週末は確か、撮影で京都だったかな？」

真奈美さんは私のスケジュールを把握してくれていたようだ。プロ内ではボイストレーナーも兼務しているだけあって、全体的な行事予定に通じているし、時々事務作業を手伝っている姿も見かける。私も真奈美さんの予定を思い出しながら、会話を続けていく。

「はい、とても楽しかったです。真奈美さんほもうすぐ映画撮影でしたよね」

「ああ。クランクインは月明けからだね、ロケ地が遠方だね。明日には移動さ」

「ウチからの出演者も多いですよ。事務所、カラッポになっちゃうんじゃないかな？」

「はは、そうかもしれないな。事務所のGWはスタッフ総出の忙しさが確定だな」

真奈美さんが出演する映画は、新人発掘プログラム『シンデレラガールズ』に登録されているアイドル達でキャスティングされた、いわゆる宣伝映画で、端役まで全てアイドルを登用するため、当然ながらウチに所属しているアイドルの殆どは映画に参加することとなっていた。でも私は、スケジュールの都合でオフアーを受けることができなくて、残念で仕方ない。

「映画もそうだが、加蓮のCDもいよいよ明後日リリースじゃないか。おめでとう」

「はい！ありがとうございます」

そう、スケジュールの都合というのは、念願のCDデビューが決まったからだ。私にとって、いや、私だけじゃなく全アイドルにとってこれ以上に優先される仕事はないはず。嫌がるとすれば杏か乃々くらいじゃないかな。

ともあれ、ここ約半年ほどはCDデビューを中心に仕事をしてきた。それに、リリースすればそ

れで終わりじゃない。この後も宣伝や歌番組といった売り出し関連のイベントがたつぷりと組まれている。

「とつても嬉しいんですけど、おかげでGWが無くなっちゃうのは残念ですね」

「それは望みすぎと言うモノだ。この業界、CDを出せるアイドル候補生はごく僅か。その壇上に立てたことを顧みれば、休暇とのトレードオフは受け入れないと」

「ですね。今後もサイン会やミニライブがいつぱい入ってますから、オフは暫く取れませんが、私だけでなく奈緒も一緒ですし、それに今、お仕事が楽しいですから、乗り切ってみせますよ！」

「それはなにより。忙しさは人気のバロメーター。そして忙しさを楽しめるようになれば一流だ」

「ふふ、真奈美さんらしいですね」

「その忙しいところ、足を止めさせて悪かったね。CDデビューイベント、思いつきり楽しんでくると良い」

「はい。真奈美さんも撮影ロケ、楽しんできてく

ださい」

会話を切り上げて、最初と同じように手を上げてエントランスを出て行く真奈美さんを見送り、私も事務所へと歩き出す。

時折すれ違ふスタッフさんと挨拶を交わしながら階段を上る。プロダクションビルにはエレベーターもあるが、レッスンは無い日は極力階段を使うようにしている。少しでも体力を付けるために始めたんだけど、この前トレーニングルームの増強工事が入って、事務所フロアが三階上に移動したのが地味にツライ。おかげで事務所フロアに着いた時には大抵息が上がっている。改装案を出した人を少し恨みつつ汗を拭い、息を整えたところで事務所のドアを開けた。

「おはようございます」

事務所のドアを開けての一声は、仕事モードへと入るスイッチでもある。

あくまで個人的慣例なものなので反応は求めていないけど、今日はいつものよりは少し多い返事が返ってきた。

「おはようございます加蓮ちゃん。撮影お疲れ様でした」

多数のスタッフやアイドル達に先んじて近づいて来たのは、受話器を置いたばかりの事務のちひろさん。スタッフの中でも特に多忙で、一般事務の他、全プロデューサーのアシスタントやアイドル達のケアなど、一人で幾つもの仕事をこなしている。一度なんでそこまでするのか聞いてみたら『やりたい仕事をやっているだけ』と答えがあった。そんなこともあって、プロダクションのことでちひろさんが知らないことは殆ど無いと言われていたりするし、当然私のスケジュールは完全に把握しているようだ。

「早速ですけど、今日のミーティングは時間が変更になりました。加蓮ちゃんのプロデューサーさん、そして凛ちゃんのプロデューサーさんにそれぞれ急な来訪が入ったためで、開始が一時半遅れます」

「来客じゃ仕方ないね。凛と奈緒は？」
「凛ちゃんはちょうど電話が来たのでその事を伝

えたら、時間に合わせて来るって言ってました。奈緒ちゃんにはメールを入れましたが、たぶんいつも通りの時間に来ると思いますよ」

ちひろさんは予定の変更に加え、関係する人達の動きも合わせて教えてくれた。プロダクションの方針で『シンデレラガールズ』は担当プロデューサーがマネージャーも兼務しているけど、そのあたりを苦手とするプロデューサーも結構多くて、いろいろとサポートをしていたらいつの間にか事務所全体のスケジュラーになっていた、と聞いたこともある。そのせいか、ちひろさんには頭が上がないプロデューサーもいて、そういう所を目撃するとちよつと面白かったりする。

「なので、それまでは自由時間となります。外出してもいいですし、事務所で待機するならソファークセットが空いているので使ってもいいですよ」

「うーん、奈緒はいつも通りなら、事務所です」

外出するほどの用事はないし、奈緒が来たときに誰も居なかったら寂しがるだろうし。そう考え

春麗らかな日々も過去になり、新緑香る季節がやってきた。五月。桜の花もとくに散って、その代わりに綺麗な緑色が町に溢れてきた。この季節はとてほっとする。無駄に暑くないし、風が気持ち良く頬を撫でていく。時折強い風が吹くけれど、基本的にちよつど良い風が多い。

事務所までの道にも道路を沿う形で木を植えられていて、日陰が至るところにある。その日陰を風が通り抜けるおかげで空気が冷えて、すごく心地が良い。アタシは事務所に向かう途中のこの道が好きだ。学校に通うことで季節を感じるように、アタシは事務所へ向かうこの道で季節を感じることもができる。

時折、歌を口ずさみながら、アタシは事務所までの道を辿る。

歌は好きだ。自分の歌を持てたことで、前よりもっと好きになれた。その影響か、アタシはつい歌を口ずさむようになってしまった。正体がバレるとめんどうだから、極力歌うなどは言われているけれど、すぐに忘れてしまう。

それに歌を口ずさみながら歩いていると、いつの間にか事務所に着いてたりする。時間を忘れられるんだ。十字路を曲がれば、もう事務所が見える。アタシは駆けることなく、ゆつくりと事務所に向かう。そして、曲を一つ歌い終わると同時ぐらいに、アタシは事務所にたどり着いた。建てつけが微妙に悪いドアノブを捻り、事務所に入る。

「おいーつす」

部屋に入って扉を閉め、足を踏み入れたところで、違和感にふと気づく。返事が一つもない。

首を長くして事務所の中を眺めてみるが、プロデューサーは営業やその他諸々だとしても、ちひろさんの姿もない。電気は点いているし、鍵は空いているもんだから、誰かしら居るとは思うんだけど。

「おいーい」

声で呼びかけながら、とりあえず奥に進んでみる。人の気配がまるでないし、ひっそりとしている。電気だけ点いているのが、余計にひっそりさせているみたいだ。おいーと呼びかけながら、机

の下を見てみるけれど、輝子も乃々もない。

「やっぱり誰もいないのか?」

「神谷さん……」

と思つたら、奥の応接室からひよつこりと裕美が顔を出していた。今にも泣き出しそうな、そんな顔をしている。裕美がそういう顔をしていることは度々あるから、珍しいことじゃない。まあ、事務所に人がまったくないから、何かがあつたのは明白なただけだ。

「どうした? プロデューサーにいじめられでもしたか?」

「ち、違います……あ、でも、助けて欲しいんです」

ひとまず応接室に入り、ソファに荷物を置きながら、頭の中で言われた言葉を反芻させる。助けてほしい。

「助けて? え?」

「わ、私とユニットを組んでくれませんか!?!」

*

「はい、お茶」

「あ、ありがとうございます」

何度か給湯室でお茶出しを手伝つたこともあつて、お茶の葉の置き場なんかもわかつている。最近、歌鈴がお茶にハマつてゐるらしく、今回は給湯室にある歌鈴のお茶を使つてみた。ドジつて大量に買つてしまつたらしく、勝手に飲んでも良いとお達しが出てるので、出すのに問題ないはず、だ。

「どういたしました」

アタシもソファに腰掛けてお茶を啜る。少し熱く、アタシは慌てて息を吹きかけて冷ます。どうにも熱いのは苦手で、温度調整を失敗してしまつた。こうなるとすぐに飲めなくて、アタシはごまかすように笑う。

裕美はアタシが渡した湯のみを両手で持つたまま、ぴくりともしない。何かを真剣に考えているようで、ずっと眉にしわが寄つてゐる。

「落ち着いたか?」

「はい」

声をかけると、裕美の眉からしわがなくなる。

どうも集中が途切れると、眉から力が抜けるみたいだ。わかりやすいなあ、なんて思いつつ、これでようやく何が起きたかを聞けそうな気がしてきた。いつまでも人がいない事務所にいるのもなんだか寂しいし。

「ちひろさんは？」

「プロデューサーさんは今出迎えと営業行つて、ちひろさんは銀行に行つてます」

「珍しいな、ちひろさんいつもパソコンでやつてるのに……」ちひろさんが鬼気迫る顔でパソコンの画面を見ているときは、大概お金のことをしてるから分かりやすい。「んじや、ユニットはなんなんだ？」

アタシがそう聞くと、裕美はお茶を机の上に置き、ソファに立ってかけていたバッグから可愛らしいピンク色のクリアファイルを取り出した。そこからホッチキスで留められた紙を取り出して、アタシに差し出す。

アタシは少しだけ冷めたお茶を恐る恐る飲みな

がら、それを受けとり、表紙を眺めた。関裕美プロデューサー大作戦とでかでかど書いてある。マル秘とか書けばそれっぽいのに、でかでかど書いてある辺り、なんというかプロデューサーらしい。

その資料をべらべらとめくってみる。中には何をするかといった詳細が書かれている。だけど、ユニットのメンバーの片割れが埋まっているわけではなく、仮の資料のようだ。

「えっと、プロデューサーさんがトライアドプリムスの一人とユニットを組ませたいって言つて……自分で組みたい人を選べ……」

いつもなら、社長とちひろさんとプロデューサーが決めるんだけど、どうも今回は違ったアプローチをするらしい。そりゃあ、どっちが良いかなんて実際にやってみて比べるのが一番良いんだろうけど。

「また唐突なことするな……理由は聞いてみたか？」

「えっと、私を大々的に取り上げたいらしくて……ちょっと前にのあさんと十時さんでパニーさん

店番に立つのが好きだった。

小さな街の、小さな商店街の一角にある、小さな花屋。

幼い頃から花が好きで、小学生の頃には将来の夢として『お花屋さん』なんて事も書いていた。

子供の、それも女の子の書く将来の夢としてはありふれたもの。勿論私もまだ子供だったから、それは何も知らず無責任に描いた夢ではあったのだけれど、それでも同じような事を書いた他の子よりかはもう少し現実味のある夢だった。

小さな街は、私が生まれた街で。

小さな商店街は、私が育った場所です。

小さな花屋は、私が暮らす家で。

つまりは実家が花屋だったからであって、そして生まれた頃から花に囲まれて育った私にしてみれば、このまま将来は自分がこの店を継ぐのだと信じていた訳だ。

信じていて、そして今でも割と信じている。

スカウトされて、アイドルなんてものになっても、普通とは少し違うだろう道を進むようになって、

それは変わらない。

花が好きだ。

親から聞いた話では、物心が付く前から目を離すと店の方に行っていたとか、ぐずったりした時も店に連れ出すと途端に大人しくなったとか。

幼稚園に通って、小学生になって、中学に上がつて、そして高校生になって。

その時々で子供なりに色々な事があって落ち込んだりした時や、考え事をしてる時なんかも、こうして花に囲まれていると、気分が落ち着いた。

店番として立っているのだから、お客さんに暗い顔は見せられない——なんて、そんな強制的に気持ちを上向かせるような面が無い訳でもないけれど、それでもやっぱり、花に囲まれているのが好きなんだと思う。

色も形も様々な花が並ぶ、甘い匂いが香る場所。

それでも、お母さんにはそんなこちらの心情はバレているようで、そんな時に手伝うとか言う「あらあら」なんて笑って奥へ引つ込んだりするのだけ。

更に言えば、それこそ私が生まれた頃から私の事を知っている商店街の人なんか、口には出さないものの微妙に態度が違うというか。具体的には差し入れだと言って自分の店の物をあれこれ持ってきてくれたりする。買いに来たはずの花の事なんてすっかり忘れて。

流石にそれは悪いからと断っているのだけど、そんなだからか私がアイドルになって、デビュー曲のCDが発売された時なんかは、もう商店街中がお祭り騒ぎのようになつたりもしたのだ。

商店街の端から端まで私ののぼりが立てられて、横断幕みたいなまで掲げられて。

朝学校に行く時には何もなかったのに、夕方になつて帰つてくるとそんな事になつていたものだから、本当にびっくりした。

即座に商店街の組長さんの所に行つて全部引き払わせたけど、次の日はオフだったにも関わらず学校を休んでしまった。というか部屋から一歩も出なかつた。

「……昔はよくからかわれたりしたなあ」

取り留めない思考がよく解らない方向へと逸れていったところで、漏れた一人言に意識が現実へと戻される。

見慣れた場所。見慣れた光景。

季節の流れに合わせて店に並ぶ花もまた移り変わっていくし、定番の物以外は気候の影響とか流行りなんかで変わっていくから、全く同じになる事はない。

けれど、それでもやっぱりそれは見慣れた光景であつて、そこに自分がいる事に安堵する。

「あ、と。いらっしやいませ……つて、蘭子？」

考え事をしている間にお客さんが来ていたようで、慌ててそちらへ向かうも、目に入った後ろ姿に思わず足を止めてしまった。

上から下まで一分の隙もない黒のロリータファッション。それだけなら他にもそういう人はいるだろうし、服に合わせて髪を染めるのも珍しい事ではない。

でも、服はともかく左右に揺つて巻いた毛先まで完璧なプラチナブロンドの髪ともなれば、少な

くとも私は神崎蘭子以外に見た事はない。

足を止めてしまったのは、意外な所で知り合いを見つけたからというのもあるけれど、店先に差し込む日の光によって、磨き上げられた銀細工のように輝く髪に目を奪われたから、という方が正しいかもしれない。

こんなのを見れば誰だって立ち止まるだろうし、すれ違えば振り返るだろう。

「蒼き瞳を持つ者よ、何故此処に!？」

「あ、やっぱり蘭子だ」

振り向いた彼女の声を聞いて、というよりその言葉で疑問は確信に変わった。

こんな喋り方をするのは、それこそ日本中を探してもそうそういないだろう。

或いは蘭子のファンの人達の中には真似をする人もいるかもしれないけれど、テレビやラジオに出演する度に他の出演者もスタッフも視聴者も置き去りにしていく、そんな彼女の言葉を真似出来る人がどれだけいるのかは中々に怪しいものだ。

最近では蘭子の言動をまとめて解説しようとする

ファンのブログまで出来たらしいし。

「なんでって言われても……ここ、私の家だし」
前にもこんな事を言った気がする。あの時は確か相手がプロデューサーだったけど。

「家？」

「うん、家」

首を傾げる蘭子を連れて店の外まで出て、ほら、と店先に張り出した庇を指差す。

そこには丸い文字で『Flower Garden Shibuya』と書かれている。

以前、古くなった庇を取り替える時に折角だからと卯月が書いてくれたのだ。

何が折角なのかはよく解らなかつたけれど、それまでのゴシック体をそのまま並べただけの物より断然可愛らしいと中々に好評なので感謝している。私はあんまりこういう女の子っぽい字は書けないから。

「それで、今日はどうしたの？　こんな所に来るなんて珍しい、というか初めてだよね」

家が花屋、という事に何かしら思うところがあ